

あきる野のスギ・ヒノキ林

あきる野の多くの人工林は、戦後の拡大造林で植栽され、出来上がった森です。

全国的には、人の手が入らない放置林(荒廃林)が問題にされますが、あきる野では、手入れが進みきれいな森が増えています。しかし、森はすぐには出来上がりません。

これから20年～30年も経つと大木の美林があきる野の森林景観になっていくと思います。



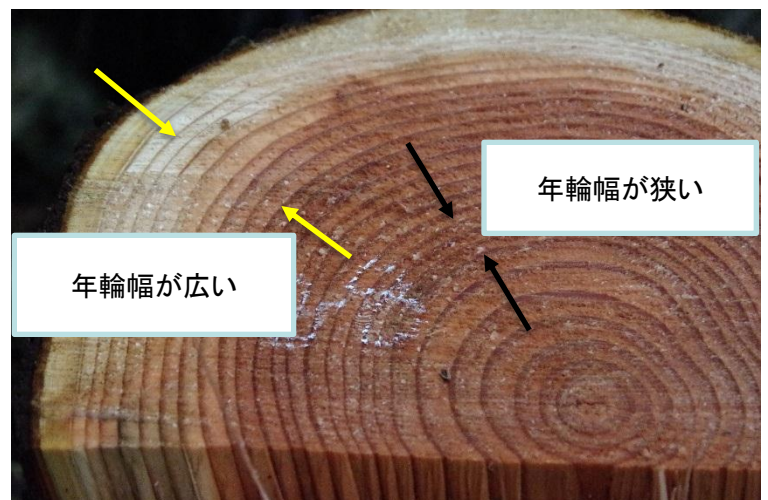
木が育つ時、1年毎に一本の年輪を作って生きています。その年輪の数を数えると、その木の年齢が分かります。

年輪幅が広いところ、狭いところが見られます。

幅が広いところは、順調に木が育った証で逆に狭くなっているところは、色々な要因で木の育ちが緩慢になっていることが分かります。一般的には、放置林など成長が緩慢になっている森で、間伐や蔓きり(つるきり)をすると、その翌年から年輪幅が広がり、森の管理の履歴を年輪に刻んでくれます。

特別な例として、冷夏や暖冬などの気象条件でも木の成長が変わってくるので、過去の気象を知ることができます。

特に樹齢が数百年の古木だと、昔の飢饉や干ばつの年を記録してくれ、過去の歴史や伝承を証明する手段として利用されます。



森の履歴 年輪の話

あきる野市を含め西多摩は、江戸時代から続く林業地帯で、多摩川・秋川を利用して木材を消費地の江戸に運搬していました。江戸への運搬は、西多摩だけでなく、埼玉の飯能を中心とする西川林業が荒川を使って木材を運搬していました。しかし、あきる野市には用材生産をする森だけがあるわけではありませんでした。戦後の拡大造林までは、屋根材を生産する茅場(かやぶき屋根)、炭を生産する炭林(落葉広葉樹林)、田畑の肥料として利用する落ち葉や薪などを調達する里山などが暮らしを支えていました。その上でスギやヒノキの用材生産をする森があり、多様な森がありました。

年輪の不思議

年輪の中心は幅が広く、外側は年輪幅が狭くなっています。この傾向は、ほとんどの樹木の成長で見られます。これは、若木がすくすく大きくなり老木はゆっくりと育つことになりますが、一つの考え方で、若木も老木も1年で育つ幹周が同じで仮に幹周が年に1cm大きくなるとすると、幹の細い若木は、年輪幅が広くなり、幹が太くなった老木でも、幹周を1cm伸ばすと、その年輪幅が狭くなるという具合です。

とても大雑把な話ですが、幹周と年輪数でその木が1年でどれだけ幹周を大きくしてきたか分かります。



写真① スギ 幹周107cm 21年



写真② スギ 幹周104cm 53年

写真①と②の年輪を比べると幹周は大差ないので、森の外見は同じように見えますが、年輪は倍以上違います。これは、スギが植林される前の土地利用が関係していると考えています。

①は、山の中ですが畑地だった場所で、②については代々スギが植林されてきた場所だと考えています。

これらは極端な例ですが、森ごとに成長の度合いを見ていくと、代々植林されてきた森、茅場、炭焼き林、里山、畑地などの違いが分かってきます。これは、以前の土壤の肥沃度に差があり、植林後の木の育ちが変わってきていると思っています。

萌芽更新したケヤキ ⇒

かつて炭焼きに利用されていた名残で、奥山の広葉樹林でたびたび見かけます。

奥山の炭林は、落ち葉掻きされることなく、養分が蓄えられおり、植林された木もよく育っていると思われます。

同じ広葉樹林でも、里山では、落ち葉、落ち枝なども持ち去られ、収奪が多くやせた土壤となっていると思われます。

同じ広葉樹林でも、その利用の仕方、土壤の肥沃度に大きな差がみられる傾向があると感じています。

(杉野)

